

# 第31号

発行：Dream 五代塾  
吹田市千里山西 5-14-17  
発行責任者：理事長 川口 建

「赤心」継がん

Dream

# 五代塾 Sinbun (新聞)

Godaijuku

## 直木三十五・織田作之助が描いた

### 五代友厚像

#### 小説家が描いた五代友厚

大阪ゆかりの昭和の文豪、直木三十五と織田作之助は、戦前に五代友厚を描いた。

●直木は『五代友厚―大阪物語続篇』『直木三十五全集第6巻』(改造社 1934)、『五代友厚・大阪物語続篇』(博文館 文庫 1941)を

●織田は『五代友厚』(日新社 1942)、『大阪の指導者』(錦城出版社 1943)を刊行した。

戦後の小説家では、

●小寺正三『五代友厚』(新人物往来社 1973)、

●真木洋三『五代友厚』(文藝春秋 1986)、

●阿部牧郎『大阪をつくった男 五代友厚の生涯』(文藝春秋 1998)、

●佐江衆一『土魂商才 五代友厚』(新人物往来社 2004

などがあるが、他にも数冊発刊されている。

以下に直木三十五と織田作之助が描いた五代友厚像をまとめた。

Dream 五代塾顧問 上村 修三

(五代友厚顕彰会世話人)

#### 直木三十五

『五代友厚―大阪物語続篇』

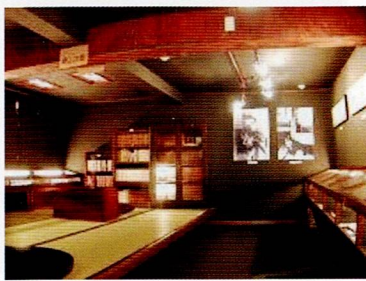
この小説構成は、序(一〜七)、その幼少年時代、その青年時代、官界時代、大阪時代、終わりに、となっている。「もう、恐らくは、大阪の相当の年配の人でも、五代友厚が、誰であるかを知らぬであろう」という書き出しで始まる序で直木は、「友厚大い」という会の名で編集された「五代友厚像」

が上巻のみ刊行されて下巻が出ていないと嘆いている。現代文に読みやすくして引用すると、「わたしは、昨日で、序を終

え、今日から、この伝記に入るつもりであった。だが、私は、大阪の人々、就中、実業家に対して、一言しておきたい事のある事に気がついた。(中略)友厚会というからは、相当の実業家が集まっていたにちがいない。もし集まっていなかったら、大阪の実業家なる代物は五代友厚の事績すら知らぬ、馬鹿野郎である。その人々が、それだけの金さえ出さなかつたという事は、一体なんであるか?私利

我欲のほかに、眼中何物もない、大阪商人、費六の下卑野郎、馬鹿、畜生、あんぼんたんと、言われたって、上げ得られる面があるか?」と、友厚会が下巻を発刊していないことに憤慨して、「五代友厚―大阪物語続篇」を刊行

した。直木は、この作品では、五代友厚の伝記ばかりでなく、「大阪における近代資本主義の成立過程」を描き、昭和恐慌という経済危機(昭和恐慌)のなかで、「こういう時代に新しい五代友厚が出てこなくてはならない」と、大阪人を奮



直木三十五記念館(中央区谷町6丁目)

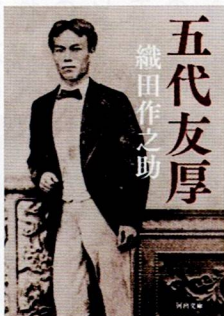
立たせるようなメッセージを発している。

#### 織田作之助

『五代友厚』『大阪の指導者』

評伝的歴史小説『五代友厚』は、生麦事件(1862)、薩英戦争(1863)でイギリスの捕

虜となり横浜に移されて英艦から脱出し、その後の埼玉での潜伏・放浪生活と長崎潜伏・帰郷(1864)と14名の留学生を率いての渡英・英国留学(1865)を扱っている。巻末に、「五代龍作編『五代友厚伝』に拠って年譜を記している。『大阪の指導者』は五代の生涯を描いた評伝となっている。第一章では、織田は商工会議所前(大阪堂島)の五代友厚銅像(1900年建立)の風貌に惹かれて、「友厚もまたその精悍さの度で龍馬と伯仲しているのみならず、龍馬に劣らぬ新人の風貌を持っていた」と記し、今日の大坂が発展しているのは第一に豊臣秀吉、第二に五代友厚のおかげにもかかわらず、渋沢栄一は長く記憶され、五代は黙殺されているのは不公平だと憤っている。織田は友厚会編『故五代友厚』(1921)はデタラメ評伝と酷評し、五代友厚の女婿・五代龍作編『五代友厚伝』(1933)は五代家の豊富な資料に基づいているので概ね信用できるが、余りに英雄視もされているところはおかしいと感想を述べている。第二章から第三章は、上海渡航(1862)から官辞職(1869)までを描き、第四章から第八章までは、五代友厚の経済人としての大阪での業績と北海道官有物払下事件(1881)を扱っている。終章となる第九章では、五代の遺志を継いだ人物(藤田伝三郎、広瀬幸平等)を紹介し、「維新の際には友厚という指導者が出て、よく大阪の危機を救った。今日大阪はよく昭和の新しい経済体制に適応し得るだろう。大阪の指導者という証文を今日友厚の手から渡される人は、いかなる指導者であろうか。いかなる友厚が今日の大坂に現れるだろうか。・・・」と締めくくっている。



五代友厚(河出文庫)

直木三十五・織田作之助

五代友厚評価

直木・織田の五代友厚評価、当時の読者へのメッセージなどをまとめるにつぎの図表となる。直木の五代友厚小説が、織田作之助にとつて大きな刺激となつて、織田作之助の五代友厚本が生まれたといつても過言ではない。

Table with 2 columns: 直木三十五 (1891-1934) and 織田作之助 (1913-1947). Rows include birthplace, education, death date, 五代友厚像, and message to readers.

直木三十五『南国太平記』(1930年6月)翌年10月、『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』連載

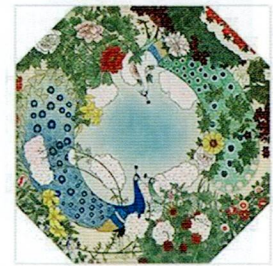
▼島津斉興の世子斉彬を廃し、斉興の愛妾お由良(ゆうら)の子久光(ひさみつ)を藩主にしようと画策する上士階級と、聡明な斉彬を世継ぎにと願う軽輩の武士階級との対立抗争と

して知られている幕末の薩摩藩の御家騒動、いわゆるお由良騒動を素材にしている。激動する幕末維新の時代相を背景に、斉彬をめぐる上士・下士の二階級の争闘がスピーディーな文体で生き生きととらえられている。この『南国太平記』執筆から、直木は、五代友厚に関心を持ち、五代友厚について調べあげて、『五代友厚 大阪物語続篇』が生まれた。この作品が五代友厚小説の嚆矢となつた。



プラトン社『女性』

▼クラブ化粧品で有名な化粧品会社の中山太陽堂(現・クラブコスメチックス)が設立した出版社。女性を読者層にねらった斬新な文芸雑誌として、『女性』(編集:小山内薫、『苦楽』(編集:直木三十五、川口松太郎等)の2誌を創刊した。デザイナーは、岩田専太郎等で、そのデザインは華麗で大正モダンニズム、阪神間モダンニズムの勃興に多大な影響を与えた。おもな執筆者は、泉鏡花、大佛次郎、谷崎潤一郎、武者小路実篤、与謝野晶子等がいた。



クラブコスメチックスが、大阪・通天閣に天井画を複製・寄贈

五代友厚も立ち寄った 外曾祖父永見の家(中の三)

Dream 五代塾顧問 會野 豪夫

五代、長崎との十年間

アメリカのマシユ・ペリー提督が軍艦四隻を率いて浦賀に現れたのは嘉永六年(一八五三)のことだった。明治維新の十五年、前、今から一七三年前のことである。『泰平の眠りを覚ます上喜撰(蒸気船) たった四杯(船)で夜も寝られず』



黒船来航 嘉永6年(1853)

上喜撰:宇治の高級茶の銘柄。杯:小舟の意。(「たった四隻の蒸気船のために 幕府も庶民も夜も寝られない」、の意)。

ここで本稿登場人物のおさらいをしておく。ペリー来航の年、薩摩藩士五代友厚は十八歳、父五代秀堯の死後一ヶ月目のことだった。四年後から幕末までの一〇年間にわたる長崎との関りが始まる

とは夢にも知らない頃だった。長崎銅座町の豪商永見商店主永見傳三郎二十三歳は、父と兄

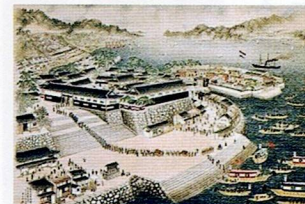


長崎銅座町にある「銅座跡」「永見徳太郎通り」の標識

を亡くして若くして店主として活躍していた。その弟米吉郎(筆者の外曾祖父)は十四歳だった。海外に関心があった彼らは早船でのニューズを聞いてどのように感じたのだったろうか。

長崎海軍伝習所

四年後の安政四年(一八五七)、二十二歳になつて五代は藩から選ばれて長崎にある幕府の海軍伝習所に入所した。少し落ち着いて五代は薩摩藩御用達の永見商店を訪れ、永見兄弟と親しくなつた。Wikipediaによると、長崎「銅座の永見家」は江戸後期に貿易、金融業、大名貸、地主として巨万の富を築いた家系で、独自の商業活動を展開して地域経済の発展に大きく貢献した一族として知られていた、とある。永見商店は薩摩藩御用達として同藩に資金の大名貸を行うことにより藩の上層部とも交流をしていた。友厚は年齢が前後する永見兄弟と直ぐに親しくなつた。



長崎海軍伝習所と出島(鍋島報効会蔵)

薩英戦争と五代の娘

文久三年(一八六三)薩英戦争の開戦直前に、長崎東濱町の徳永廣子(後にみちと改名)が五代の女児治子(後に松子)を生んだが、幕末の混乱期でもあり入籍しなかった。(薩英戦争については省略する)

薩摩藩英国留学生を引率

慶応元年(一八六五)、五代の建議により薩摩藩が英国に留学生十五名を派遣することに。幕府に対して密航であるため、全員偽名を用いた。五代はその代表団四名の副使として陰曆三月二十一日薩摩の串木野港をグラ

バー商会の汽船に乗り込んだ。二ヶ月と二週間の航海ののち五月二十八日に英京倫敦(ろんどん)に到着した。

代表団は七ヶ月間に亘り欧羅巴を視察して十二月二十六日仏蘭西マルセイユ港から帰路につき、翌慶応二年元旦を地中海のマルタ島の港で祝い、二月九日に帰藩した。同じ時期に長州藩も伊藤博文など五名の留学生を英国に派遣していた。(「長州ファイブ」)しかし伊藤と五代はロンドンで会うことはなかった。薩摩藩留学生の一部はロンドンで伊藤らと若干の往来があった。

### 永見米吉郎、大坂に進出

五代は慶応二年(一八六六)二月、鹿児島に帰国直後その月に藩の御納戸奉行格で勝手方御用人席外国掛を命ぜられた。実質的に薩摩藩の通商、運輸、外務の実務を担当する大役である。五代らが帰国する前月には京都で薩摩藩家老小松帯刀、西郷隆盛と長州藩木戸孝允等が薩長同盟を結び、薩長と幕府との対決が取りざたされ物情騒然となっていた。

薩英戦争以来三年振りに、五代は四月から再び長崎在勤となった。そしてパリで決めたきた翌年の第二回パリ万博への薩摩藩としての出展準備、そして勤皇方各藩に対する武器、衣糧、食料等の調達、供給に奔走した。薩摩藩御用達の永見商店も薩摩藩の要望に応じて調達できる物品を鋭意集荷して発送を行った。その間傳三郎、米吉郎兄弟は五代から欧州事情を教わることに精を出した。或いは忙しい中、五代を丸山の料亭で振舞ったこともあったことだろう。

若い米吉郎は五代の指示で、藩の汽船開運丸に長崎で便乗して鹿児島や兵庫大坂間を往復する内に、親戚の多い長崎に



外曾祖父 永見米吉郎(45) 明治 16年

いるより新天地の大坂に雄飛せんと、兄の傳三郎と五代と相談した。二人とも米吉郎の志を後押ししてくれて慶応二年米吉郎は勇躍薩摩の藩船開運丸で長崎を後にして大坂に移住して中船場に店を構えた。大坂弁に悩ませられながら兄傳三郎の指示で大坂の市場開拓に奔走した。

### トーマス・グラバー

輸入品を五代はトーマス・グラバー



トーマス・グラバー

商會から購入した。そもそもグラバーは、五代が海軍伝習所に入所して三年後(七年前)に來日してすぐに永見傳三郎から日本の国内事情や、貿易の仕来り等を習っていたのだ。そして來日の翌年に傳三郎が亡兄徳太郎の大浦にある持ち家をグラバー商會に賃貸した仲だった。その後、各藩の欧州からの物品の輸入が急増したためグラバー商會は盛況だった。

永見商店としては、国内分裂の内戦に加担するような武器の取引に関与したとは考えられないし、幕末に永見商店が巨利を博したという話でも聞かえてこなかった。傳三郎は幕末期には大名貸も行っており、むしろ金融取引に関心があり、維新後すぐに金融事業を手掛け、やがてそれを基に明治一〇年第十八国立銀行(資本金十八万円)を設立して初代頭取となった。

### 二〇〇〇両

先に薩英戦争の混乱の年に長崎の徳永廣子(後にみち)が五代の庶子治子(後に松子)を生んだ。慶応三年(一八六七)十二月下旬、友厚は幕府と薩長が一発即発の中を京に上ることになった。五代は家老新納刑部と共にモンブラ伯をイギリスの神戸領事に送り届け、また京の薩摩藩邸に赴くべく十二月二十八日兵庫

の港に着いた。

長崎を出発するに先立ち五代は、もし薩摩藩等が幕府と開戦して負けた場合は藩主と共に海外(上海)に逃れるという事態もあり得る、として四歳になっていた庶子治子(松子)の終身養育資金として金二〇〇〇両を傳三郎に託した。(現在一両五万円として一億円、桁が一つ多いようにも思うが...)五代が如何に永見兄弟を信頼していたかが分かる。後年、五代と娘の治子(松子)の出会いはいは後述する。

### 慶喜將軍東走、大坂城炎上

さて、米吉郎が大坂に転居したあと慶応二年一〇月に五代は鹿児島に呼び戻された。五代は馬関(下関)に何度か出張して木戸孝允等と薩長同盟等の交渉をした。翌三年八月モンブラン伯を出迎えるため上海に出張した。



炎上する大坂城 慶応4年1月9日

三年末に王政復古の大号令が発布されて徳川幕府が倒れた。明けて慶応四年正月三日、鳥羽伏見の戦いが始まり七日徳川慶喜將軍が大坂城を抜けて開陽丸で東走し、九日大坂城が炎上した。大坂に出てきてまだ一年余りの永見米吉郎にとっては先の読めない不安な日々が続いた。前年末に九州から兵庫の港に來ていた五代を米吉郎は訪ねて市中の噂話を話したことと思う。

五代は一月十一日の神戸事件(備前藩士の行列を横断した仏蘭西水兵の事件)、二月十五日の堺事件(無断上陸した仏蘭西水兵を土佐藩士が襲撃して十一名を殺傷した事件)、同二月三十日の京での英吉利パークス公使襲撃の維新三大涉外事件を新しい政府の上司同僚部

下と共に心血を注いで解決した。神戸事件の備前藩瀧善三郎と堺事件での十一名の古式に則った切腹は欧米人に切腹の様式を深く印象付けることとなった。

### 大阪の永見商店

明治維新の二年前に長崎から新天地を求めて単身大坂で物流と金融業を始めた永見米吉郎(筆者の外曾祖父)は、まだ全くの個人商店でもあったので幕末維新の騒動に余り打撃を受けることなく業務を続けることができた。また心強かったのは長崎で兄事していた五代が新政府の高官として大阪に定住したことだった。(明治三年に一ヶ月間余り横濱に在勤したが)

五代にとっても、若い米吉郎が一年余り前から大阪に先発してくれていたことは大いに役立つ。五代は三十三歳、米吉郎は二十九歳で、共に独身である。大坂の言葉や地理や地元の人々の気質のこと等を五代は素早く米吉郎から吸収した。

明治二年「藩籍奉還」により新政府が各藩の蔵屋敷が没収したのを多分五代の斡旋により米吉郎は元吉田藩蔵屋敷を自邸として購入したことは本紙二十八号に記述し、参考平面図も掲載した。(A4サイズの図面を)希望の方は事務局まで)朝叔母によると、自邸の座敷の床柱には「紫檀、黒檀、鉄刀木(たがやさん)」の三種の銘木が使われていた。大阪市内に三銘木の床柱がある家は二、三軒しかなかった、と云うのがご自慢だった。(後の二郎の名前は残念ながら失念してしまった)

筆者は昭和六十三年に兼松を満五十五歳で



鹿児島島の五代友厚像の前(移設前)新婚旅行の途次、筆者と妻昌子。昭和42年2月

退職し、生れ故郷オーストラリアの在京大使館に日本からの工業投資を促進する顧問として五年間勤務した。次いで平成六年から五年間(財)大阪府臨海臨空センターに海外からの企業誘致担当顧問として働いた。その頃に五代塾に入塾した。

居所も西宮に移したが、平成二十九年暮れから又東京で息子達と住んでいる。大阪府のある課長に五代と永見の話をしたら明治二年と三年の丁寧な墨書された「職員録」を持参してくれた。職員録によれば明治二年と三年だけでも五名の永見姓の名前が記載されていた。(四く八年分は欠落)永見克也伯父(元十八銀行)はこの古い「職員録」のことを知らずに旅だつてしまつたが、伯父は「維新後、米吉郎祖父の家には長崎から若い親戚が大勢ころころと滞在していた」と話してくれていた。

Wikipedia が発達して、一〇年前前に初めて「たがやさん」を検索して勉強をした。独身の五代は維新と共に大阪に定住することになったが、住居は転々とした。しかし米吉郎の住む淀屋橋界隈からは常に近い所に住んでいたのとお互いにしばしば立ち寄っていた。米吉郎は大阪での五代の最初の肝煎(現在の秘書)として、又事業の協力者として終生五代に仕えることになった。(肝煎はその後常に複数いたが後述する) (以下次号)

### Dream 五代塾セミナーを実施 2月21日(土)14時

## Dream 五代塾活動状況



テーマは「小松帯刀の死と政局の動き」、本紙では、五代友厚の莫逆(ばくげき)の友・小松帯刀の幼少く青年時代を中心に、人となりを抜粋し紹介する。

小松帯刀(たてわき)は天保6年(1835)

10月、薩摩国喜入(きいれ)の領主、肝付兼善(きもつきかねよし)の三男として生まれ、肝付尚五郎兼才(なおごろうかねとし)を名乗る。領主の家柄だけに幼いころから大事に育てられた。早くから書を習い、10歳の頃から儒学を習い、昼は造士館に通い、夜は夜中でも目覚めると夜通し読書をするほど勉強好きであった。(同年、五代友厚、篤姫、坂本龍馬など) 安政2年(1855)、尚五郎21歳の時、藩主島津斉彬の若手抜擢の一人(下級武士の西郷吉之助らも抜擢されている)として江戸詰めを命じられ、斉彬と共に江戸に上京した。ところが、尚五郎は江戸到着からわずか2ヶ月で薩摩に帰ることになった。

薩摩では、小松家・旧禰寝家(ねじめ)28代当主小松清猷(きよもと)が琉球王国(現・沖縄県)の守備を命じられ、派遣後わずか2ヶ月後に29歳の若さで急死した。清猷には後継ぎがないため、斉彬直々の仲介で尚五郎が小松家への養子が決まり、清猷の妹千賀(おちか)の夫となり、「小松尚五郎」として吉利(よしとし)を治めることになった。尚、小松家(禰寝家)、肝付家は共に「一所持」で、藩の重要な役職に就くことができる家柄である。

安政5年(1858)3月1日、「小松帯刀清胤(きよよかど)に名を改める。同年7月に斉彬逝去し、藩主は29代島津忠義となる。(斉彬の異母弟・久光の子) 続く文久元年(1861)4月、久光が「国父」として迎えられ、藩の実権を握る。

小松は新しい藩主や国父のもと大抜擢され、詰衆(詰衆)番頭や奏者番を勤め、藩の重職につく者であることを意味する人事のもと、久光の側近として活躍する。

当時、幕府の政策に反発する浪士たちは京阪神に続々



小松帯刀像 鹿児島市 宝山ホール

集まり、勤皇の先駆けにしようとするのが殺気立ち、騒然となつている。薩摩藩誠忠組の過激藩士もこの中に大勢参加している。文久2年(1862)4月23日、勤皇を義挙と考える浪士たちが伏見寺田屋に集まり決起準備中のところ、久光は鎮無史を派遣、浪士の暴走を未然に鎮圧したことで、朝廷の信頼を得、また、幕府からも好感をもたれ、久光は双方に大きな発言力をもつことができた。これが「寺田屋事件、又は寺田屋騒動」という。

先の件があつて、薩摩は朝廷と幕府の融和政策、公武合体に乗り出す。いわゆる久光の幕府改革の建言実行に移すことになり、これを促すため、江戸へ勅使を派遣されるよう進言、大原重徳卿が勅使に任せられ、その護衛役を仰せつけられた。

江戸での小松は、国元の家老同様の御用取扱いを命ぜられ、幕府との種々交渉に当たり要件終了し3カ月の滞在で8月21日、久光・小松は再び勅使を警護し江戸を出発した。ところが武蔵国生麦村(現横浜市鶴見区生麦)で、久光一行の行列を横切ったイギリス人4人を薩摩藩士が殺傷した。これは「生麦事件」という。(詳細は以前に紹介済みで省略)

以上の朝廷のため幕府の融和をはかり、幕府の改革に尽くし功績が顕著であることから朝廷では久光に従四位下中將を賜わる内示があつたが、斉彬の功績を引き継いだものとして辞退、小松が朝廷と交渉し斉彬の贈位は異議なし、また「照国公」の称号もあわせて賜わることとなった。「照国神社」の号はこの称号による。

一方の小松は、京や江戸で朝廷の中心公卿方や、有力な諸侯や幕閣と交渉し、家老同様の任務を処理して公武合体を推進したことや、斉彬公の贈位交渉に成功を治めた功績は顕著



であり、久光はその手腕力量を認め、12月24日で家老に昇格させた。若干28歳の若き家老が誕生した。小松の家老としての功績は大きく、1866年の坂本龍馬、西郷隆盛、大久保利通らと薩長同盟、1867年の徳川慶喜の大政奉還に当る、維新後の新政府の総裁顧問に就くなど重要な職務で活躍した。しかし、明治3年(1870)、36歳の若さで亡くなった。「幻の宰相」ともいわれる実力者である。(川口)

### ◆第26回五代塾セミナー予定

- ・日時：2026年4月18日(土) 14時～16時(偶数月第3土曜日)
- ・テーマ：五代友厚小伝・第12話 「鉾山業・弘成館の展開」
- ・場所：川口宅 事前申し込み制
- ・会費：1000円

### お知らせ・その他

堺事件で犠牲となつた土佐藩・フランス兵の法市妙国寺で行われた。双方の死を悼み、堺事件を語り継ぐ会(ボランティア)が妙国寺のご支援も得て法要を続け、今回で9回目となる。参加者は、ご遺族の方・堺市長・一般の方・スタッフを含め114名が参列。来年は事件発生から160年の区切りの年で、複数日をかけた企画を検討中。



(連絡先:川口建)  
・Email:gogoken12345@gmail.com  
・Tel:080-4497-5688  
・HP:https://www.dream-godai.com



★編集後記はお休みします